

真我のお話の初めに — 『瑜伽論』における観察・思惟・分別に就いて —

真如を實際に認識することは、三昧によらずしてできるかということについては『瑜伽論』に、

真如は観察することができる。思惟することができる。また分別することができる。とあります。この「分別する」とは、理屈一点張りで考えることとあります。スピノザ (Baruch de Spinoza オランダ 一六三二—一七七) は「宇宙の本体を考える。けれどそれは直接認識はできない。理性によって知ろうと思えばへかくあるべし」という論断しか得られない。へかくある」というのは論断し得ない」と言っている。推論的のみであって、これを『瑜伽論』で「分別する」と言っておりあります。

それから「思惟する」とは、チラとばかり真如の事実を掴まえて、真如を考えることとあります。「観察する」とは、真如と合一して自分が大我となり、そして真如を観察することとあります。そのためには念仏するか、坐禅することが必要であります。これから真如を思惟いたします。「これはできることだ」と弥勒菩薩は言われました。真実の自己を御同様に認めたい訳であります。

## 真我のお話の終りに

『瑜伽論』に「真如は観察することもできる。思惟することもできる。また分別することもできる」とありますが、この「観察することもできる」というのは三昧という心で真如と一体となって観察する時をいう。つまり真如となって真如を見るのであります。このためには坐禅や念仏が必要となります。

また「真如は思惟することができ」というのは、夜のお話（「真実の自己」のお話）はこれでありませう。一部分その事実を掴まえるのであります。それから全体を考えることを得ませう。観察し得た所は陶醉でない、阿片でないということをお話すため思惟したのであります。

それから「真如を分別する」とは、西洋の哲学者のやっていることであります。スピノザは「宇宙の本体は直接経験できないから、理屈をもって推論するだけだ。だからそれについて、へこうなければならぬ」というよりほかなし、へかくあるべし」と断言するほかなし」と言っています。

## 覚明

『首楞嚴經』に「覚明」という言葉が書いてある。「覚」とは覚り。「明」とはハツ

キリ。「覺つている」と「ハッキリハッキリ」である。それ故覚明という熟語ができた。『首楞嚴經』は禪門では大変尊んでいるお經の一つである。もつとも承陽大師（道元禪師の諡号）は「それほど尊ぶに足らぬ」と言われたが、全部についてそう言われたのではない。

### 抵抗は大我の意志

一心に念仏して事実大我となると、風の吹くのも、水の流れるのも自分の心のうごきとなる。それは推論的に分かるものではない。事実その通り直観の事実となる。そうなれば一切の抵抗は自分の意志である。（上人、手で柱を押されて）この柱は小我には抵抗と感ずる。大我に目覚めると大我、如来の意志である。

「三昧の念仏」は「なれ、なれ」という。（注）まだそうなっていない間は無量寿如来というには早すぎる。もしそうなれば、一往無量寿の如来である。

（注）「感謝の念仏は（聞け、聞け）」という注文の念仏である。三昧の念仏の方は「成れ、成れ」という」と、上人常に仰せられた。

## 五法

ある仏教の哲学の本（『入楞伽經』卷七）に、

相・名・分別・真如・正智

と説かれてある。「相」とは山川草木日月星辰等、現象の差別的なすがた。「名」とはそれを名付けるところの名（仮名）。「分別」とは対境に対して働きを起こし、その相をとって、ああいうものだ、こういうものだと思ひ計らうこと。梵語ヴィカルパ（vikalpa）の訳。「妄想」とも訳す。弁栄聖者の「如来光明讚の頌」（光明大系『道詠集』四二六頁）の「智慧光」の初めに、

聖旨に背きて無明となり 妄想顛倒なる物の 識知争でか絶対の 如来の妙境測りえん  
とある妄想顛倒のこと。

『撰大乘論』には「凡夫の起こす分別は虚妄分別だ。このような分別では真如の如実認識はできない」と言っている。

「真如」とは如来様のことで、如来様を分析、研究、抽象、総合するのはもったいな  
いから真如と言って、研究の対象とする。

「正智」とは真如を認識する作用のことで、真如と真如を認識する作用とが合一した  
ところ。『撰大乘論』にいわたる能（知）所（知）の対立を超えた無分別智を加行智・

根本智・後得智の三階に分かつ。

### 戒淨上人と原青民師

科学者や哲学者が理屈をもって論証しているものを、原君は事実宇宙は大我であることを直観した。理屈で知るのは理屈を媒介とする故、間接認識である。原君のように直接認識とならなければならぬ。仏教は言境ごんきやうに非ずして行境ぎやうきやうである。話を聞いたたり、本を読んだりしただけでは、仏教の理想実現したとは言えない。一心に坐禅するとか、お念仏する所にそれは得られるのであるから一所懸命三昧の修行をしなければならぬ。

\*

聞く主、見る主としての自己は、実に宇宙大であります。一心に念仏すれば宇宙が自分のものとなり、大我が了々たる目覚めたる事実となります。そうなたる所を禪宗では悟りが開けたと申します。念仏門では極樂の人となつたと申します。原君は弁栄聖者の御指導によつて、遂にその境界に達しました。そして、

「今まで太陽系は素晴らしい大きいものと考えていたが、大我に目覚めたところ、それは自分の心の中の一つの砂粒程の大きさもない」

と述懐されました。一心に念仏せばそれが事実となります。専心念仏三昧発得を切に

勧めます。ぐずぐずしていると死にますよ。

\*

大我に目覚めると言っても、最初は三日月程であります。初めはそれはいわば豆ランプ程の光であり、薄暗く、範圍も狭く、明了の度も低い。それが四日月五日月と段々お育てを頂くのですが、『瑜伽論』を見るとその程度が五階に分けて説いてあります。その第五階が十五夜の完全の状態、教祖釈尊の<sup>だいばうねはん</sup>大般涅槃であります。

原さんは惜しいことに悟りが開けたその翌年の七月亡くなりましたが、原さんの達せられた境界は、実に尊く結構であります。未だ浅うございます。

### 「真実の自己」について

あの「真実の自己」は、弁栄上人が「よくやった」と言って印可して下さいましたから、またあの唯識に関する論文<sup>注</sup>は私の著作として残してもよいと思っております。

しかし、生き如来様である弁栄上人の御真筆の御遺文がありますから、今さら私ごとき至らぬ者が、光明主義の中心真髓について自分の著述を残すつもりはありません。

(注) 上人の東京帝国大学の卒業論文『<sup>じょうちゆう</sup>成唯識論の心理説』。(『笹本戒浄上人全集』下

## 悟後の修養が大切

笹本上人御在世当時は、お念仏をしていて法眼や慧眼を開かれたという方を処々に聞いた。ある青年がお念仏の修行をしているうちに、お堂も何もすっかりなくなってしまう、しかも眠っているのではなくハッキリハッキリと目覚めている本来無一物の状態になった。笹本上人の所に伺ってその心境を述べた。するとお上人様は、

悟後の修養が大切でございます。

—とお諭しになった。